

# 綴葉

ていよう

'20

8  
9

No.390

あなたが創る生協の書評誌



## 話題の本棚

永田希著『積読こそが完全な読書術である』

鈴木創士著『離人小説集』

## 特集／休み

新刊コーナー／新書コーナー／名著再読／ことわざへの誘い

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: [http://www.s-coop.net/about\\_seiyo/public\\_relations/](http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/)



UNIV. 京大生協  
CO-OP 綴葉編集委員会

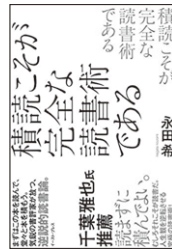
読まないこと、それも読書

積読こそが

完全な読書術である

永田希著

イースト・プレス



引きこもって読む本がある。課題をこなすのに読まねばならない資料がある。やらなきゃいけない、そう思ってもつい後回しにした結果、机の上に、棚に本が溜まっていく。さあどうしよう……

現代は情報の流入量が多くて、全ての情報を消化しきれないという事態に至っている。実際、SNSでは一瞬毎に新しい情報・意見が流れ、知り合いの近況が更新され、これから先の予測まで（私的なものだが）入手できる始末だ。サブスタクリプションで映像作品も見放題になった。望まなくとも情報・コンテンツの方からこちらへ「見てみたい」「やってみてみたい」の時代になっている。つまり、すでに情報報社会（本書では「他律的積読環境」という言葉で説明される）になっているというわけだ。

そんな現在においては、読書とは情報の消化を必要とするリスク行為である、と本書ではまとめられる。リスクは減らしたい、そのためには消化するべき情報を拾えるようにと取舍選択が必要であり、他律的な情報流入から自律的な情報管理の場を作ることで、それが積読なのだ。こうして積読に積極的な意味が附加される。

しかしつい我々は本を読まずにいることに後ろめたさを感じる。著者は『本で床は抜けるのか』に掲載されたエピソードに言及しな

がら積読と後ろめたさの関係を「本とは読まれるべきもの」という我々の固定観念に依拠するものだと看破する。だがその「本を読む」とはどういうレベルを指すのか？ そして我々の固定観念は如何にして打破できるのか？

この問いに著者は、この分野に関する有名な先達の著、『読んでいない本について堂々と語る方法』や三月号の新人生特集で取り上げた『本を読む本』等を引用しながら道をつける。ずばり完読の不可能性でも言えよいだらうか。一冊の本の内容・意味を全て把握することは不可能なのだ。それゆえ前述の固定観念もいわば杞憂なのである。不完全な読書という形を受け入れた時に「読まない」ことも読書の一つの形であることに気づくことが出来る。

そして「読もうと思う」本を読むために、「初級読書」、「点検読書」、「分析読書」、「シントピカル読書」等の読み方が紹介される。大事なのは読書の際のテーマを決めること、あるいは「二割八割の法則」に従ってテーマに必要な情報を文章中から探し出すこと、そんな実践方法も提示される。ちなみに本書も実はこれまでの読書本の内容を引用したりするなど「二割八割の法則が当てはまるのでは」と評者は感じた。前述の読書本を読んだことのある人なら割と気軽に読み飛ばせる本ではある。だがそういう気軽さが読書には必要なのかもしれない。映画のDVDを見る時に倍速で飛ばしたり見直したりするように。

この一冊でこれまで数多ある読書術の本の内容を網羅的に知る事が出来るのも便利である。あとはやる気の問題かな。（ねい）

（二一〇頁 本体一七〇〇円 4月刊）

## フィクションの持つ他者性と自己の複数性

### 離人小説集

鈴木創士著  
幻戯書房



小説やフィクションの世界が持つ魅力のひとつは、「ここ」ではない「どこか」「私」ではない「だれか」へと、想像力の翼を広げ、自由に他者の身体や世界へと身を浸すことにあるのではないだろうか。とりわけコロナ騒動で活動の自粛を強いられていること最近の我々にとってはそうしたフィクションが救いになる事も少なからずある。フランス文学者であり、ミュージシャンでもある鈴木創士氏

による『離人小説集』はそうしたことを改めて考えさせてくれる小説集である。

ただしこの小説集が他の小説と異なるのは、この小説の登場人物たちが、芥川龍之介と内田百閒に始まり、フランス象徴主義の詩人ランボー、稲垣足穂、ポルトガルの詩人フェルナンド・ペゾア、フランスの詩人・俳優のアントナン・アルトー、更には平安初期の文人小野篁など、古今東西の作家や詩人を、虚構の登場人物としていきいきと描き出していることである。

作者はこの七篇からなる小説集において、これらの作家たちの人生を語ると同時に、時にはそれらの作家たち自身に成り代わって声を発する。そうしたこの特異な小説集の根底に横たわるコンセプトは、ランボーに捧げられた本書の第二章「丘の上の義足」の中に見

られる次の一節に端的に表されている。「そのあと眩暈とともに俺自身も少しずつ遠ざかる。言葉がはじめからもっていた言葉の無のなかへ。(中略)ペンの音が聞こえる。誰が書いているのだろうか。君なのか？ 彼なのか？ 俺なのか？ 紙の表面にさざ波がたち始め、溶けて海に混じってしまったかのようにだった。」既に二〇歳過ぎて作品を書き終えてしまい、その後は詩を離れエチオピアへと旅立った早熟の天才ランボーは、「私」とは他者である、という言葉を残したことも知られている。この言葉はさまざまに解釈できるが、文学創造における詩人の言葉、あるいは言葉そのものの本来持つ他者性を力強く訴えかける言葉であり、本書の中に登場するランボーにも描きこまれている。

そうした他者性、あるいは自己の複数性は、ポルトガルの詩人ペゾアにおいては、演劇的なものであり、無人の劇場の中で出会うものとなる。この詩人が創作の過程で生み出した「異名」をもつ登場人物たちは、虚構世界における詩人の別の姿なのであり、自伝的な登場人物とは異なり、作者とは全く異なる人格や身体的特徴を備えるものである。それは虚構の人物であり、舞台の役者にも重なるものであろう。奇しくもペルソナに通じるポルトガル語を名に負ったこの詩人の人生は、演劇的な虚構の複数性に満ちていたものだった。

本書において、語り手は一人称と三人称の間を融通無碍に交感する。著者の声、登場人物である詩人や作家の声が自由間接話法ともとれる重層的な文体によって作品世界が紡ぎ出され、評伝や伝記とはまた違った文学の楽しみを存分に味わえる。(投稿：M・N)

(二四六頁 本体二九〇〇円 2月刊)

## 翔太と猫のインサイトの夏休み 哲学的諸問題へのいざない

永井均著 ちくま学芸文庫

まずは安直に、夏休みを舞台にした哲学の入門書からはじめよう。

中学2年生の伊豆蔵翔太と自称「哲学者」の猫のインサイトの4つの対話からなる本書は、著者の永井自身が中学生であった頃に読みたかったものを自らの手で表現した著作である。彼らの議論は夏休み初日の朝、翔太の子ども部屋から始まる。ここで交わされる議論の題材はどれも、彼が眠っている間に見た夢の内容に由来しているが、いわゆる外界の事物の認識の問題や他我問題や、今や業界でおなじみともなった「培養器の中の脳」やクワス算などの思考実験まで、どれもオーソドックスなものばかりである。また、各議論の終わりには、デカルトやヴィトゲンシュタインなど、対話の内容に関わる哲学者の議論をフォローしてくれるのもありがたい。

本書の最大の特徴は、哲学という営みの何たるかを示してくれることである。インサイト曰く、哲学とは「人の目を引く奇抜な思想を作り出すようなもんじゃない」。たとえ常識的で平凡な結論に至ろうとも、そこに至るまでに緻密に論証を重ね、検討していく側面に哲学の本質を見抜く（そこに単なる「思想」との相違点を見出す）インサイトのまさに「洞簏」には、私も思わず膝を打った。

ここまでのハードな議論に圧倒されてしまうことなく、どうにか食らいつつは行く早熟な中学生の頭脳とそのスタミナには、嫉妬も禁じえない。それは猫が喋り出す設定も霞んでしまうほどである。ともあれ内容自体は一連の真正な哲学議論であり、彼らの議論の流れを追って行くうちに読者が得るものも、決して少なくはないはずだ。

(八雲)

(288頁 本体880円)



## 特集

# 休み

いろいろあった二〇二〇年にもついに夏休みが来た。ということで、今月号の『綴葉』は「休み」をテーマに特集を組んだ。ながい「休み」であれ、ひと「休み」であれ、日常のあれやこれやを脇に置けば、気分は天国。親類知人とのいざこざや、社会人特有のトラブルを誰しもが抱えているからこそ、「休み」をとることは重要なのだ。そして読書ほど休暇の一時にカフフルな喜びを与えるものもない。編集委員による「休み」の提案、どうぞ気軽にご覧あれ。

(トホ)



## 悲しみよ こんにちは

フランソワーズ・サガン著  
 野野万里子訳 新潮文庫

「ものうさと甘さが胸から離れないこの見知らぬ感情に、悲しみという重々しくも美しい名前をつけるのを、わたしはためらう」——本作の有名な書き出しである。ならばこの小説に湛えられた感情を何と呼ぼう。この小説には夏が詰まっている。若さも愚かさも疚しさも、泡のような儚さもすべて。



セシルは17歳。幼くして母を亡くし、プレイボーイの父とその愛人と、地中海沿いの貸別荘でバカンスを過ごしていた。セシルは父が好きだった。愛人を連れてきても気にならなかったし、むしろ勉強などそっちのけで父と一緒にパーティーに繰り出していた。「大学に入り、そして卒業するための勉強に打ちこむよりも、太陽の下で男の子とキスする才能のほうに恵まれている」女の子。青い海に白い砂浜、小麦色の肌の青年と恋に落ち、楽しいバカンスになるはずだった。

だが歯車は狂い始める。父親が別荘に再婚予定の女性を連れてきたのだ。彼女の名はアンヌ。セシルが昔から憧れていた容姿端麗な女性。だがセシルや父とは逆に、秩序立った市民的な生活を好んでいた。やがてアンヌが享樂的なバカンスの生活に侵入してきた。父を独占し、セシルと恋人を引き離し、彼女を勉強部屋に閉じこめた。彼女と家族になるのは危険だ。「この人は冷たく、わたしたちは熱い」。嫉妬と焦燥の熱に浮かされ、セシルは彼女を陥れようと奸計を巡らせる。人生の夏が、悲しみなど知らずいられた休みがじきに終わりを告げることに気づかず。

情熱は虚無と背中合わせて、ひと夏はさながら白昼夢だ。夢を見るように追いかけてみよう、この若く愚かな少女の夏を。(ミセ)

(197頁 本体490円)

## 十五少年漂流記

ジュール・ヴェルヌ著 椎名誠、渡辺葉記  
 新潮モダン・クラシックス

あなたは突然休みを過ごすことになったらどうするだろう。それも二年間も、無人島で、友達だけで。

本書は誰しも子どもの頃から知っている作品だ。原題を直訳すると「二年間の休暇」引率付きの修学旅行に出かけるはずの寄宿学校の生徒一五人。待ちきれずに乗る予定の船に先に忍び込んで泊まることにしたが、目を覚ますと船ごと漂流していることに気付くところから話が始まる。年齢的には今の中学生でしかない少年たちは、いきなり放り込まれたサバイバル生活を規律正しく過ごしていく。自律的な近代人のお手本みたいだ。遭難による逼塞した生活が陰惨なものとならないのは偶々船に備蓄物があって余裕を見出せるという設定もあるが、食料を探しに、自分たちのいるところを知るために、未知の世界へと果敢に踏み出す少年たちの前向きな姿勢も影響しているかもしれない。新しいものを発見し、新しい場所を開拓し、知恵を出し合って生活を上げようとする彼らの姿はどうか眩しく、難儀にハラハラしながらも読んでいる側の心はいつのまにかワクワクしてくる。



現在の視点から見れば、英・仏人の主人公によるリーダー争いや黒人のボーイ、前述の開拓者的な彼らの姿勢自体も、悪くいえば帝国主義最中の欧米の姿勢が反映されているともいえるだろう。だがそれをもってしても本書のワクワク感が色褪せることはない。

訳者に名を連ねる椎名誠は『あやししい探検隊』シリーズなど、冒険者の側面を持つ作家だ。自ら世界各地を巡る彼が翻訳家の娘と共に、今度はフィクションの冒険世界を文章に起こす。どんな世界がそこに広がるのか、大人のあなたに今一度勧めたい。(ねこ)

(465頁 本体1800円)



## 呪われた部分 有用性の限界

ジョルジュ・バタイユ著  
中山元訳 ちくま学芸文庫

人間は仕事をしなければならぬし、仕事を続けるには休みが必要である。だが、資本主義社会におけるこの労働と休息の繰り返しが、絶対のシステムとは限らない。手持無沙汰な休日をお過ごしなら、日頃の労苦の根幹部分に思いを馳せるのはどうか。



だからといって重々しい理論書と眺めっこせよとは言わない。本書は思想家バタイユの著書『呪われた部分』の構想と断片である。一貫した解釈をそこから抜き出すのは学者の仕事である。未完成状態で寄せ集められた文章なので、各人が気に入った箇所をパタリと開いて読んでみることもできるだろう。

もっとも、各断片が連関しているのも事実である。本書の中でバタイユは、近代の閉じた経済システムの外部について繰り返し言及している。近代化によって生じた資本主義社会は資本の生産によって経済が回るため、人間が価値を見出す有用な物を巡ってしか機能しない。その閉じた経済原理の外との交流をバタイユは探り出そうとする。例えば近代化以前のアステカ文明には、人間の価値体系を超越した神との交流を可能にする儀礼があった、と彼は論じる。また近代化を遂げた社会の中でも可能な交流体験に、著者は随所で触れている。漂う空気との一体化をもたらす喫煙、つい飛び出してしまった笑い、あるいは死。それらの危うい魅力を語りながら、彼の論考は有用性の出口ギリギリまで自身の思考を位置付けようとする。

我々の労働過程そのものがそう簡単に変わることはない。しかし休みの合間、その過程の外部を意識すれば、また違った時間を過ごせそうだ。

(とよ)

(413頁 本体 1600円)

## 「語り合い」の アイデンティティ心理学

大倉得史著 京都大学学術出版会

疾風怒濤の青年期の果て、ようやく大学に入学してほっとしたのも束の間。たっぷりと時間があるからこそ、色々な悩みが湧いてくる。そんな青年期独特のモヤモヤを、著者の大倉得史は学部時代から研究し続けている。



著者の専門は発達心理学であり、本書はエリクソンの青年期アイデンティティ理論を問い直すことから始まる。著者は精神分析学や現象学の概念を輸入することで理論面から再定義を進めるだけでなく、自身の考案した質的心理学研究法「語り合い」法を用い、抽象的な理論を「実感」に近づける。一般的な聞き取り調査研究では語り手の言葉を客観的に分析するのに対し、「語り合い」法は、研究者自身が語り手との対話の中で間身体的に感じられたことや、それをメタ的に分析した結果を論文上で呈示することで、従来の客観主義的心理学が捉えきれなかった語り手のその人「らしさ」を読者に伝えようとする。

「自分は何をやりたいのか」という答えの出ない問いに苦しみ続けるといった、典型的なアイデンティティ拡散を経験した当時大学生の「私」が、二浪一留物書き志望「坂口」、政治活動に取り組む5回生「間宮」、社会のあらゆるものを批判する「須賀」など5名の同年代の学生と語り合い、著者自身も揺らぐ。それをメタ的に分析し、得られた気づきを言葉にしていく地道な作業の先に、従来の客観主義的心理学が捉えられなかった、読み手の実感に近い青年期「らしさ」がある。

登場人物たちはみなどこかで人生の「休み」を取り、それぞれの方法でアイデンティティ拡散をくぐり抜けていく。本書を読み、あなただけの休み方を探してみてもいい。(石透)

(383頁 本体 3800円)

## 女優 岸恵子

岸恵子監修  
キネマ旬報社

特集最後は「休みだし映画を観たい、でも何を観ようか」と悩むあなたを未知なる映画の世界へ誘い、映画ライフをより充実したものにしてくれる、そんな本を紹介したい。



容姿端麗、抜群の姿態、優れた演技力と語学力で日本とフランスを股にかけ、市川崑、木下恵介ら名監督に愛される。他方筆をとれば外連味の無い文体、鋭い感受性、透き通った思索には大岡信ら文筆家も舌を巻く。二物も三物も神から授かった女優。岸恵子だ。

この本は岸恵子自薦の作品紹介、インタビュー、作品や撮影風景の写真、論評、そして彼女自身のエッセイからなるオフィシャルブックである。数多の写真には、様々な役を演ずる彼女の一瞬が鮮やかに切り取られている。けれどそこにおいて尚存在感を示すもの、それは彼女の目だ。憂いや愛、恨みを混えたその目は、どきりとさせる凄みと共にどのような映画の場面なのかと読者を瞬時に引き込む。

写真に次いで注目したいのがインタビュー。「卑しい女、権力やお金に媚びたりする女は、絶対に似合わないと思うからやりません」——演技とは自分の中から引き出すもので、自分にはない役作りはしない。それをモットーとする女優の言葉はあまりに正直で切れ味が良く、時に読者をもはっとさせる。その妙な目で捉えてきた世界を覗きながら読者は、作品の更なる魅力や様々な監督、作品、原作への好奇心をいや増しに感じることだろう。

普段は選ばない映画を観てみる、こんな出会いも休みの醍醐味の一つだろう。表紙を飾る艶やかな笑みを混えた女優。真知子巻きの下のその目は、新しい世界を前にしたあなたを誘うが如くじっと見つめている。(リンダ)

(224頁 本体 3000円)

## 陰翳礼讃

文：谷崎潤一郎 写真：大川裕弘  
パイインターナショナル

評者は旅行が大好きである。中でも旅館に泊まるのが楽しみだ。ホテルも設備や機能面で優れているが、やはり旅館は非日常ながらも安心と安らぎが得られる。どこことなく懐かしい感じがするからだろうか。もしあなたがこの感覚に少しでも共鳴するならば、きっと本書を気に入ることになるだろう。

『陰翳礼讃』は文豪：谷崎潤一郎が書いた日本人の生活についての随筆である。昭和初期に書かれたこの作品は、西洋化が進み、日本固有の美や趣が失われてゆく中で、これを「陰」という観点から捉える。本書は、この谷崎の文章に加え、現在日本に残っている、その文章にふさわしい写真が対応して載せられている。半分が谷崎の文章、半分が写真という構成だ。

対象は多岐にわたり、家屋や屏風、食器やペン、はたまた日本人自体、その肌にも及ぶ。例えばある和室の写真。開かれた窓の前に、低い木の丸机と座椅子がある。明かりといえは窓の向かいの木に反射する日光と、行燈のぼんやりしたオレンジ。シンプルな写真だがその空間にいることを想像していると、次第に穏やかな気持ちになれる。見れば見るほどその場に引き込まれる。

写真は全国各地で撮られているが、中でも多いのが京都である。最後の撮影地のページを見れば、旅館や料亭、寺などこの写真が分かる。お気に入りの写真の場所へ、実際に訪れることも可能だ。今さら生活様式をあの頃に戻すことはできない。谷崎も便利さゆえに失われるものを認めている。だがたまには休みの日に、古き良き日本を体感し、その中に耽るのもよいだろう。(ナガイ)

(256頁 本体 1900円)



## 新刊コーナー

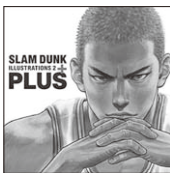
ぬいぐるみと  
しゃべる人はやさしい大前粟生著  
河出書房新社

「つらいことがあつたらだれかに話した方がいい。でもそのつらいことが向けられた相手は悲しんで、傷ついてしまつかもしれない。だからおれたちはぬいぐるみとしゃべろう」。

主人公の七森は男子大学生。ぬいぐるみサークルに所属している。活動は、ぬいぐるみとしゃべること。つらいことがあつたとき、それをだれかに話すと、そのだれかに重荷を背負わせたり、同じくつらい気持ちにさせたりするかもしれない。だからぬいぐるみとしゃべる。部員たちは互いのつらさには触れない、干渉しない。それが「やさしさ」だから。本作の中心となるのは、自分が人を傷つけることに傷つく七森の葛藤だ。高校時代に友人が女子を品評するのをただ笑って流していたこと。セックスを暴力みただと感じること。女性への性暴力に心から怒りながらも、

男性である自分に疚しさを感じてしまつたこと。だがそれを七森は、いちばん仲のいい女友だちに話せない。七森の抱える個人的なつらさはどれも、男性優位の社会にどうしようもなく組みこまれていく。だから人には言えない。だからぬいぐるみとしゃべる。七森は「やさしい」。自分を絞め殺してしまいたいほど。タイトルはキャッチーで文体も軽いが、あくチュアリティのある問題を扱った作品である。自分が男性であることについてきわめて個人的な言葉で語っていること、そこがこの小説の繊細な強みだろう。(三七)

(一七六頁 本体一六〇〇円 3月刊)

PLUS/SLAM DUNK  
ILLUSTRATIONS 2井上雄彦画  
集英社

あの男たちが帰ってきた。また少しだけ、本書で夢の続きを見られそうだ。

本書は『スラムダンク』第二弾のイラスト集だ。一度このマンガを読んだ人なら、誰でもこう思っただろう。「この男たちの続

きが見たい」と。このイラスト集はそれを叶えてくれる。「彼らにはこんな場面があったんじゃないか」と井上雄彦氏が想像し、新たな書き下ろしイラストが生まれた。その書き下ろしに加え、「新装再編版」の表紙など、過去のイチオシのイラストが三〇点以上も収録されている。どのページをめくっても、本編を思い出すに違いない。

その中でも注目したいのが、「脇役」のイラストだ。『スラムダンク』の主人公チーム以外のイラストも多分に収録されており、本編の中では描かれなかった一面を窺い知ることが出来る。漫画ではどうしても主人公のチームにスポットライトが当たりがちなので、本イラスト集でそれ以外のチームメンバーの魅力に迫れるのは嬉しいことだ。このイラスト集を通して、主人公・桜木花道の属する湘北高校は勿論のこと、それ以外のチームにもそれぞれのドラマがあったこと、そして彼らも桜木と同じ一夏を過ごしてきたことに、改めて気付かされる。

また別の見どころとして、井上氏のスケッチやラフ画が挙げられる。本イラスト集を開けば、きつと彼らに釘付けになるだろう。

『スラムダンク』本編とともに、本書を読ん

で、ぜひ熱い一夏を過ごしてくれ。(出席点)

(九六頁 本体三六〇〇円 4月刊)



## 科学歳時記

寺田寅彦著  
角川ソフィア文庫

記憶は五感と結び付くと言われるが、季節もまた古い思い出を思い起こさせる要因と考



える。雨に濡れる竜舌蘭に思い出す少年の日の憧れ、暑さと居心地の悪さが妙に悲しかった数学の夏、妻とその子どもを繋ぐ団栗拾い、相撲を取った今は亡き同級生達。本書に描かれるのは、季節の中に浮かび映し出される幾つもの思い出達である。

著者は物理学者でありながら、随筆を多く残した夏目漱石門下の文人である事でも知られる。本書は一九五〇年に出版された同名の随筆集に解説を加え新版として出版されたものだ。季節を題材に文学と科学を情感たっぷりに繋ぐ一冊となっている。

季節といえは、夏本番がそこまで迫っている所恐縮ではあるが、評者は夏が嫌いだ。ま

まの不幸を女々しく悔やんだり、意気地のない今の境遇に愛想をつかすのもこの頃の事である。」とある。夏を嫌う強い仲間ができたよつで心強い。また著者は自身の夏嫌いに ついて、「孟夏を迎える強烈な自然の力に圧倒されて」そのような心持になるのではないかと分析している。なるほど、夏が近づくと何か気圧されるように感じるのはその為か、と思わず膝を打ってしまう考察だ。

好きな季節にも嫌いな季節にも、移ろう四季の中に本書を添えてはいかがだろうか。

(投稿・再生)  
三一九頁 本体八四〇円 5月刊

## 哲学の先生と人生の話をしよう

國分功一郎著  
朝日文庫

國分功一郎  
哲学の先生と人生の話をしよう  
大専念人に情熱する時に読むべき一冊  
千葉雅也

大学生にもなると、全力で誰かを叱った

り誰かに叱られたりということとは、ほとんどなくなる。これはある程度大人になり、しっかりとってきたともいえる。だが都台の悪いことや耳の痛い批判に、正面から向き合うことが困難にもなっ

ているようにも思える。これは自己に対しても他者に対しても同様だ。

本書では哲学者である著者が、一般人から寄せられた三四の相談に答えている。その内容は、家族との悩み、勉強の仕方、仕事の問題など様々だ。ありふれているからこそ、誰もが抱く悩みに著者の國分はどのように答えるのか。それは最大限相談者の像をクリアにするところから始まる。

人は意図せずに自分の都合のいいように質問をする。それを上手く剥がし、相談者が自覚していない問題にまで言及しているところが本書の最大の注目点だ。例えば妻との結婚生活のマンネリ化に悩む男性が登場する。國分はその文章から像が現れない、記述されない妻を取り出し、この事実から以下のように分析する。つまり男性は妻のことを考えていないのだ。だから「結婚生活」を問題としつつも、「既婚男性の幸せとはなんなのか」という問いへと無意識に作り変えている。

中にはもっと辛辣な回答も見られる。だが厳しさというのは、一つの真摯さである。その真摯さは、「哲学は人生論である」という國分の哲学への姿勢から現れている。哲学が人生に与える、厳しくも温かい言葉や分析を手にとって感じてみてほしい。(ナガイ)

(二七二頁 本体六八〇円 4月刊)

## 移民たち 四つの長い物語

W.G.ゼーバルト著  
鈴木仁子訳 白水社



専作のままたく  
なった作家ゼーバルトの二作目が本書となる。各四編の物語を通して、

著者は第二次大戦の記憶に苛まれる人物たちを、戦争の当事者でない語り手の「私」の視点から語らせている。

作中でその生涯が語られる四人の人物の名前が、それぞれの作品のタイトルとなっている。戦前にリトアニアからイギリスへ移住し医学を修めたドクター・セルウィン。ナチスの台頭で教師の職を追われ、最愛の人を亡くした「四分の三アリア人」ペライダー。世界を転々とし、最後は仕えた家の崩壊によって精神を病むこととなるアーデルヴァルト。両親を強制収容所で亡くし、唯一人亡命した先のマンチェスターで、毎日一〇時間画業に専心するアウラッハ。「私」は彼らとの対話だけでなく、知人からの伝聞、遺された文章などを基に、四人の来し方を語る。

具体的な固有名詞が執拗に用いられ、緻密

な記述が無数の写真の挿入と共に続くが、四人の感情の内奥に触れられることはない。語り手や周囲の人間は、苦悩する当事者の選択をただ追想し口にするだけだ。もっとも、その語りにさえ時に「私」は疑念を抱き、「私は対象に公正ではありえないのではないだろうか」とまで述べる。それでも語ろうとする「私」からは、歴史を忘れようとする戦後ドイツに對峙する著者の姿勢が読み取れる。

装幀家の緒方修一の手で新たな彩りを施された本作は、読者の記憶に残り、記憶を問う読書体験をもたらすことだろう。(とよ)

(二六八頁 本体一九〇〇円 5月刊)

## ベトナム戦争と私 カメフラマンの記録した戦場

石川文洋著  
朝日選書



「何でも見えてやろう」、小田実が同名著作を上梓した六〇年代初め、多くの若者が世界

へ飛び出した。同じく沖縄に生まれたある若者も戦争の犠牲となった市民の悲哀、そこから奮起する力強さを肌と感じながら、遙かな

海外を夢見て日本を飛び出した。そして辿り着いたのは戦争真っ只中のベトナムだった。日本ではまたベトナム戦争も注目されていない六〇年代後半、稀少な日本人報道カメフラマンとして著者は政府軍や米軍に従軍した。本書は戦場を撮り歩く中で彼が「見た」ものを写真と共に振り返る回想録である。

本書を貫くのは、戦闘後の荒地に残された傷ついた市民への眼差しだ。例えばベトナムが潜むという村への侵攻に従軍した著者は無差別的で激烈な攻撃を生々しく回想する。折れた椰子、水田を赤く染める炎、爆発の地響き。それらを写真に収めた彼は軍撤退後も村に留まる。そして残された村人の亡骸や負傷した子供、懸命に生活を続けようとする母親に目を向けシャッターを切る。彼の記憶は攻撃後の方が鮮烈で、怒りが滲み出ている。故郷の沖縄戦が重なるのだ。若き日の好奇心は、報道するべく現実を一見なければならぬ」という使命感に変わる。ベトナム、そして故郷の人々に寄り添う彼は、写真に納まらない「戦争」の実体を映し出していく。

戦争で何かを解決できるか、その時最も傷つくのは誰か。戦後七年、また見ぬ将来だけをなく、過去にも目を向けることの大切さを思い出させてくれる一冊だ。(リンダ)

(四二四頁 本体二〇〇〇円 2月刊)

## これからの幸福について 文化的幸福観のすすめ

内田由紀子著  
新曜社

『幸せは、あったかい子犬』(Happiness Is a Warm Puppy)。

これはスヌーピーの生みの親、チャールズ・シュルツが出版した本の題名だ。彼にとって幸せは子犬のことかもしれないが、あなたにとっての幸せは何だろうか。誰もが望むという点では普遍的だと言えるが、その中身は一樣ではない。幸福とは、かくも捉えどころのない概念なのだ。

本書は、そんな「幸福」を文化心理学の観点から取り上げている。文化心理学とは、人の様々な心理活動と文化がどのように関わっているのかを実証的に研究する学問である。著者は、京都大学「こころの未来研究センター」の内田由紀子教授。優れた女性研究者に贈られる「京都大学たちばな賞」を受賞するなど、耳目を集めている。

近年の心理学の理論はアメリカでの研究結果から導き出されたものが多い、と著者は指摘する。しかし、アメリカと日本では幸福が



意味するものは異なる。ある実験でアメリカ人と日本人に幸せの意味を記述してもらったところ、アメリカ人は始どの回答がポジティブな内容だったのに対し、日本人は「幸せだ」と「妬まれる」「不安になる」などネガティブな記述が約三割も見られた。この結果から、幸福を論じる際には文化的な要素も考慮する必要があることが示唆される。

幸福に関わる実証研究や最新の知見が幅広く紹介されており、文化心理学の面白さが凝縮された一冊。本書を片手に、アカデミックに「幸福」を考えてみませんか。(はるな)  
(一九二頁 本体二二〇円 5月刊)

## 世界一わかりやすい 「医療政策」の教科書

津川友介著  
医学書院

「世界一わかりやすい」と銘打たれた本の中には、分かりにくかったり、そもそも内容が間違っていたりするものが少なくないが、本書は中でも数少ない例外である。



本書は中でも数少ない例外である。「医療政策」と名付けられた書籍もまた数

多あるが、その多くは、具体的なケースの羅列であることが多い。本書はむしろ、そういった事象を分析して論じるための、フレームワークの著述に重きがおかれている。

もちろん、ケースが本書に登場しない訳ではないのだが、それらは理論が有用に動くのを示すために緻密に配置されている。ミクロ経済学を基盤として個々人の行動の説明と制度の関係を鮮やかに説明する様に、本書における理論と実践の明晰な繋がりに多くの読者は幾度も膝を打つだろう。

また、最近話題となっている行動経済学をはじめとした、最新の研究成果の解説もふんだんに詰め込まれている。この一冊だけで、読者は医療政策研究の起源から最先端まで一気に網羅することになる。

著者は、統計分析を中心に扱う、いわゆる「理系」の研究者であるが、本書の後半では、政治哲学や規範理論、政策過程論までもが説明されている。いずれも導入として申し分ない内容であり、著者の幅広さを感じさせる。医療政策を分析する、豪勢な「道具箱」と呼んで差し支えない出来栄である。

同時に、「分かりやすさ」にも徹底して心が砕かれている。平易な記述と的確な説明は、著者の優秀さの証左であろう。(投稿・敷池)  
(二八二頁 本体三〇〇円 6月刊)

## 詩としての哲学

ニーチェ・ハイデッガー・ローティ

富田恭彦著

講談社選書メチエ

人環退官後も精

力的に執筆活動を

つづける富田恭彦

の最新刊のテーマ

はやはり「詩」で

ある。しかし、それはただ詩歌の内容を哲学的

的に考察するものではない。詩作に象徴され

る「想像力」の復権——本書で基調となるの

は、この「詩としての哲学」である。

古代のプラトン以来、定まったものである

真理を、理性や知性の働きによって捉えられ

るものとする「理性主義」が重視され、そし

て創作的活動は、イデアの写しであるこの世

界の、さらなる模倣であるとして軽視される

傾向があった。しかし、ローティによる「詩

としての哲学」は、このような真理観にノー

を突きつける。すなわち、物事の新たな見方

や捉え方を創造する、詩人たちの「想像力」

が私たちに新たな輝きを与えてくれるように、

私たちもまた、定まった真理を鏡のようにな

ざるのではなく、新たな生き方・考え方を創造

できる、開かれた存在なのである。



富田はこのような思想を、ロマン派詩人の思想からニーチェ、ハイデッガーへと至る系譜に見て取る。のみならず、デカルトやカントらが当時の自然科学的仮説を、その思想の核に取り入れていたことから、真理における「想像力」の重要性を明らかにしてゆく。

場所や時代を超えて示されていく「理性主義」に対する想像力の優位性」は、富田も指摘しているように、新たな観点から捉え直された西洋哲学史の二つの形である。読者はその論の「威力」を、著者の熱のこもった叙述の中に感じることができるはずだ。(八雲)

(二二四頁 本体一七〇〇円 2月刊)

## 日本の最終講義

鈴木大拙他著

KADOKAWA

「〇〇先生の最終講義があるよ」と友人に誘われたことがある。そこ

で見た先生は普段とは少し違う表情をしていた。最終講義、それは幾年と続けてきた自分の研究を振り返る機会なのだろうか。過去を郷愁するよつで未



来を眺めている眼差しが印象的だった。

大学に長くいればそんな「最終講義」と出会うことも少なくないだろう。そこには歩んできた研究生活があり、磨いてきた研究への姿勢が表れている。では今どこぞ巨匠となった人たちの最終講義とはどんなものだったのだろう。二三名の知の巨人たちの最終講義をまとめた本書は、各学問をわかりやすく解説してくる入門としても読め、また学び続けてきた人たちが辿り着く終点を教えてくれるよつでもある。

著者の一人一人はあまりにも有名だ。彼らはじつになった、しかし彼らの本は読まれ続けている。鈴木大拙は仏教をわかりやすく解説した本を書きながら、その真髄はいかに分かりにくいかを講義で述べた。網野善彦は歴史研究の転換と展望を語り、木田元はハイデガーの魅力と難解さを語った。それぞれが研究との出会いを語り、そしてその発展を述べた。バラバラな内容だが、その奥に戦争への言及が見えるのも面白い。まったく知らなかった分野でも、何故か軽快に読めてしまう。

研究を志す者達にとって最終は遠く先だろう。しかしだとしても本書を読んでみてほしい。最終講義で見える景色はどんなものだろう、そんなことを想像しながら。(きもの)

(七六〇頁 本体四五〇〇円 3月刊)

翻訳の授業

東京大学最終講義

山本史郎著 朝日新書

問い・次の文章を英訳せよ。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。」

言わずと知れた、川端康成著『雪国』の冒頭部分だ。トンネルの一文はまた良いとしても、はてさて、「夜の底が白くなった」とはどのように訳すべきなのだろうか？

本書は、長年にわたり東京大学で翻訳の研究をしてきた著者が、学生向けの講義をまとめたものだ。先述の『雪国』はもちろん、『源氏物語』『羅生門』『ホビット』『ライ麦畑でつかまえて』など、古今東西の作品が取り上げられている。大学生向けとあって語り口は平易でユーモアに溢れているが、同時に翻訳の味わい深さにも触れることができる好著だ。豊富な実例だけでなく理論の解説にもページが割かれており、読み心えは十分。

技術の発達はめざましく、機械翻訳の精度は日々向上している。だが、機械だけに任せしてしまうのはあまりに勿体ない。ことばの世界は、そして翻訳の世界は、かくも豊かなものだから。

(二〇八頁 本体七九〇円 6月刊) (はるな)

カール・シュミット

ナチスと例外状況の政治学

薩山宏著 中公新書

カール・シュミット。近年この学者が再評価を受けている。マックス・ウェーバー以来最大の政治思想家といわれる彼の魅力とは何なのか。本書は彼の主要著作を丹念に解説し余すことなく魅力を伝えている。

『例外』の思想家』と呼称されるように、彼の思想で中核をなすのが『例外』というワードだ。私たちの日常の基盤が取り払われ、例外状況に陥る時、政治には決断が求められる。例外における決断を政治の本質として定めるシュミットは、この論理から自由主義や議会主義の決断の弱さを批判していく。

一見わかりやすく解説されるシュミット像だが、本書の魅力はこうした彼の思想が生涯の中で変遷していく様を記述したことにある。決して一枚岩の思想家ではない。ナチスに協力し、戦後はヒューマニズムに走った。その時々で言説は流転し時に矛盾することもある。その分かりにくさが魅力なのだ。

友敵論や決断主義としてまとめられがちなシュミットの、奥にある多面性を紹介した本書は、原典への招待状である。

(二七二頁 本体八六〇円 6月刊) (きもの)

ビザンツ帝国

千年の興亡と皇帝たち

中谷功治著 中公新書

地中海を我らの海と称するほどに栄えたローマ帝国が、異民族の侵入で分裂してできたビザンツ帝国。その歴史は成立からも分かるように異民族との戦いの連続であった。

ビザンツ帝国はゲルマン系やアツア系民族と国境付近で絶えず衝突していた。さらに諸宗教の聖地イスラエルを、そして地中海の制海権を巡りイスラム教徒と戦いを繰り返したのは、十字軍遠征として有名だ。それらをどうビザンツ帝国は乗り越えていったのか。

また波乱万丈な帝国において、数々のユニークな皇帝や家臣の描かれ方も本書の魅力である。特に、ビザンツ最盛期の皇帝ユスティニアヌス帝の部下であるベリサリウス将軍はその皇帝のもとであげた優れた業績とは裏腹に、遺されている人物譚には将軍の人間味が溢れている。また、その皇帝の名前を継いで弱冠にして帝位に付き、ビザンツ皇帝で初めて神の代理人を自称した鼻の無い皇帝、ユスティニアヌス二世の生き様は圧巻だ。

戦争と人間。それらを描く本書は、ビザンツの魅力を深く教えてくれる。

(三〇四頁 本体九四〇円 6月刊) (投稿・鞠)



## 作ることは私を私にさせる

### クラフツマン

作ることは考えることである

リチャード・セネット著

高橋勇夫翻訳

筑摩書房



著者、リチャード・セネットはある日アメリカを歩いている時、師ハンナ・アーレントに出会った。折しもキューバ危機の状況であり、アーレントは核戦争が予期される中で「科学技術の発展」に警戒を示していた。「技術者も自分自身の主人ではない」故に「労働の上位にある政治が、モノを作る人々を導かねばならない」と。

本書の着想は、この言葉への違和感からだろう。確かに技術の発展は人類を危機に追い込んできた。しかし物を作ることは考えることと別なのだろうか。アーレントが労働と活動を区別し、考えることを公的な状況に入れる中で、セネットは労働、なかでも工作することに人間が人間であった本質を見出ししていく。それは「作ることは考えること」 Making is thinking」という彼の直観を、歴史と思想の中で叙述していく作業であった。

\*\*\*

こうして見出されるクラフツマンとは、モノ作りにこだわる職人のことである。それは芸術のような唯一無二の作品も含まれるがセネットの範囲はもう少し広い。芸術家は少ないが工作人の数はいつの時代も多い。有用性を無視して制作に打ち込み、完璧さを目指して試行錯誤する。トファルや抵抗にあいながらも苦心して自らの制

作物を向上させていく。古くは古代ギリシアにも見出せ、新しくはネットのプログラマーにも見出せる。(本書ではLimaの記述が多い。)子供の遊びにも大人の仕事にも見出せるこのクラフツマンの記述は、料理・音楽と多岐にわたる。

そこで対比されるのはソ連における住居政策であり、プライドもなければ質も低い命令で成り立った制作物だ。ここに思考は存在しない。職人が自らの制作物に誇りを持ってないとき、制作物の質は落ちるだけでなく、人間の思考そのものが失われてしまう。反省を欠いた制作物は時に人類を危機に追い込む。セネットは制作における人間の思考の重要さを丹念に記述する。

アーレントの弟子であり、ともに公共性の問題を考えるセネットにおいて、クラフツマンは政治を語る上での下地なのだろう。著書『公共性の喪失』(晶文社)において、欲望や承認の共同体である親密圏が失われた時、人は公的な空間で自己の承認を求めてナシヨナリズムへと傾倒していく様が述べられていた。その時公共性は失われる。セネットにとって公共圏の回復は親密圏の回復とセットであった。一見政治と無関係なクラフツマンは、自身の制作を通して倫理と思考を確立していく、承認の回復の場である。

人は誰しもがクラフツマンになれる可能性を持っている。制作すること、それは自分自身を取り戻す作業なのだ。情報に流されがちな社会の中で自身の制作物に向き合ってみる。消費は一瞬だが、制作は長期だ。しかし長く向き合うこの時間こそ、私が私である時なのかもしれない。

(五五四頁 本体四〇〇〇円) (まもの)

## 自分の父親に子供の作り方を教える

今回は「ことわざ」について扱おう。「犬も歩けば棒に当たる」「急がば回れ」など、日本には様々なことわざがある。それと同様に、世界各国にも多種多様なことわざ・故事名言が存在する。今回は世界に目を向けて、世界各国のことわざを見てみよう。

まず参照するのは『世界の名言 ことわざ』(自由国民社)だ。本書は九五六ページにもわたって世界各国のことわざ・故事名言を収録している。本書の見所は大きく二つある。一つ目は、なんと言っても収録される言葉の多さだ。徐にページを開けば、これまで出会ったことのない言葉に出会えるだろう。二つ目は、収録される言葉の網羅性だ。「中国の古典と詩歌から出たことわざ」「北欧の神話伝説から出たことわざ」「イスラム教とインドの宗教から出たことわざ」など、世界各地の言葉を収録している。

その中でも評者が興味を持ったものを紹介しよう。「生きていく古語」という章だ。「えげつない」「お節介」など、現代の我々が日常でよく使う言葉の由来について紹介されている。このように、様々な言葉を知ることができるのが、本書の魅力だろう。

さて、世界各国のことわざを知ったところで、「世界各地で似ていることわざって無いの?」と思う人もいるだろう。そこで、次はことわざの比較についての本を見てみよう。

『世界のことわざ比較辞典』(岩波書店)は、世界のことわざを比較し、似ているもの同士をまとめた本だ。日本、韓国、フランス、ドイツ等々、様々な国のことわざを集めており、どのページからめくっても面白い。たとえば、「自分の父親(母親)に子供の作り方を教える」はフランスのことわざで、「負った子に教えられ浅瀬渡る」

(日本)、「娘が母にへその緒の切り方を教える」(台湾)と似たものとして紹介されている。台湾・フランスは「負った子に教えられ浅瀬渡る」よりもシニカルさが加わっていて面白い。

その他で評者の目を引いたものを紹介しよう。「捨てる神あれば拾う神あり」という言葉もある。これについて「外国のものは、一神教の国が多い影響なのか分らないが、それ程広域の広がりが見られず、思わず膝を打つような類がない」と説明されている。ことわざが各国の文化と密接に関わるものであることを再認識させられる。

さて、最後に一冊。『誰も知らない世界のことわざ』(創元社)だ。本書は世界各国のことわざを、イラストとともに紹介したものだ。

本書のタイトルの通り、これまで聞いたことの無かったようなことわざが多く載せられている。前掲二冊が「辞典(事典)」的要素が強い一方、本書は「絵本」として楽しめるのが魅力だろう。

たとえば、「真昼の太陽にさらされたバケツ」いっばいのエピソードに(オーストリア語)という言葉は、「ある人がその場を急いで去ろうとしているとき」に使われるという。日本人の我々から見ると、「一見」?」?」となってしまう言い回しに触れられる。「ある日はハチミツ、ある日はタマネギ」(アラビア語)という言葉も載っている。ぜひ、その意味を考えてみて欲しい。

ここまで世界各国のことわざについて見てきたが、知れば知るほどもっと知りたくなる。時間がある時、ふとこれらの本のページを繰ると、思いも寄らない新しいことわざと出会えるだろう。そんな出会いを、読者諸君も試してみよう。

(出席点)

## 編集後記

選び取られた言葉のための言葉選び。つまり書評を、雑誌『綴葉』はお届けする。しかしこの「編集後記」というコーナーでは、担当する書き手が、自分の思いのためだけに言葉を選び取ることが可能だ。というわけで自己紹介をさせていただきます。

先月号から書評の執筆をしているとよと申します。今後は委員として本誌の編集にも携わっていきます。今は先輩委員の皆さんから仕事のノウハウを一つずつ学んでいます。

幼い頃から物語の世界で遊び続けていました。普段は文学の研究を通じて、社会のあり様について考えています。書評を書くときはジャンルにこだわらず、面白い本を分かりやすく奥深く伝えることを心がけます。

院生主体の書評雑誌という稀有な文化が長年熱をもってここ京大で息づいているのは、支援して下さっている生協の皆さん、手に取って読んで下さる読者の皆さんがいるからに外なりません。そうした共同体によって紡がれてきた想いを次代につなぐため、一時のボタンを深く握りしめ、たとえ泥まみれになろうと駆け抜けたいと思います。宜しくお願い致します。

(とよ)

## 当てよう！ 図書カード

夜に今出川通を歩いていると、ひっくり返ってジタバタしている大きな虫を見つけました。近寄って見てみると、すごく立派なカブトムシのオスだったので、家に持ち帰り、飼育しています。カブトムシに与えるべき食べ物を以下の選択肢の中から一つ選んでほしいです。

1. スイカ
2. 砂糖水
3. かき水
4. バナナ

(石透)

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください（またはe-mail:teiy@s-coop.net）。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは9月15日です。

## 5月号の解答

5月号の「3,888,111,5,9の意味は？」の答えは4. サヨウナラでした。応募者9名中9名の方が正解でした。ガラケーのボタンと、そのボタンの文字を対応させるクイズでした。図書カードの当選者は、Sosoさん、ソーシャルディスタンスさん、はーさん、たつのおとしごさん、すずめさん（順不同）です。おめでとうございます。

(出席点)

## 読者がらひひひ

○素晴らしい……。こんな困難な情勢でも発行してもらえるとほ……。 (理・深みの巡礼者)

——こんな時期だからこそ、みなさまに少しでも楽しみを与えられるように、これからも『綴葉』を発行してまいります。 (理・はー)

○こういうクイズタイプの問題も新鮮でいいですね。4.55:55.33:11です。 (理・はー)

——ありがとうございます！ 5月号は少し趣向を凝らした「当てよう！」にしてみました。楽しんでもらえたなら幸いに存じます。

○留学生です。実は、最初は日本語の練習のためにたまたま綴葉を読んでいたが、だんだん書評の世界へ吸い込まれました。 (教育・stg06)

——読書体験の一助となれて幸いに存じます。これからも読者の皆さまが本を好きになれるように、日々書評をしてみたいです。

○特集「写真」楽しませていただきました。特に「定点巡礼」と「GIFT」は考えさせられました。 (防災研・山法師)

——ありがとうございます。毎回特集は力を入れていきますので、これからも楽しみにしててくださいね。 (出席点)